

コラム 著作集をもたない大家たち

著作活動の結果が、著作者の名を冠した全集、選集、著作集として出版されることは、通例、その著者の業績が大きいものであり、高く評価されていることを意味するといっていでしょう。しかし、逆は必ずしも真ならず、著作集が出版されていないからといって、その著者の業績が大きいということでは決してありません。本書を編集するにあたって、近現代日本の思想と学問の歴史で逸することのできない人物が、たまたま著作集が出版されていないために項目として選定できないということがありました。以下に、そのような大家を何人か紹介しましょう。

明治の代表的なジャーナリストであり、昭和まで活動を続け、膨大な量の著作を残した二人の人物、徳富蘇峰(1863～1957)と三宅雪嶺(1860～1945)には今日までまとまった著作集がありません。近代日本の思想や文学の全集には必ずといっていいくらい登場する両大家だけに、本書がグレート・ワークスでなく人物紹介を主眼とするならば当然項目になっていたはずですが。この二人の著作集が編まれていないのは、その著作の量があまりに多いことも一因でしょう。ともに歴史の大作を完成させていますが、蘇峰の『近世日本国民史』<当館請求記号 210.1/34>は34年をかけて全100巻、雪嶺の『同時代史』<210.6/27>は全6巻ですが20年をかけた著作です。これ以外の著書及び雑誌・新聞の論説を併せることを考えると、たしかに全集の刊行は難しいものと思われます。

大正デモクラシーの旗手として、本書では政治学の吉野作造を取り上げました。同じく大正デモクラシーを憲法学で代表する美濃部達吉(1873～1948)も論文集は刊行(1934～35)されていますが、本格的な著作集はありません。美濃部に限らず法学者の個人著作集は意外に少ないようで、少し時代は下がりますが、末川博(1892～1977)、横田喜三郎(1896～1993)、我妻栄(1897～1973)なども著作集をもっていません。また、大正時代に西田幾多郎とともに京都大学哲学科教授を務め、吉野作造とも思想的

に共鳴していた朝永三十郎(1871～1951)も、『近世における「我」の自覚史』<121.9/22>がデモクラシーの時代風潮とともによく読まれた哲学者ですが、著作集はまとめられていません。本書巻末の「その他の主な著作集一覧」をみてもわかるように、哲学者の場合は個人著作集の刊行が非常に多いといってい状況なので、このことはやや意外な気がします。

戦後に活躍した文化人のなかでは、フランス文学から出発し、幅広い評論と社会的行動で知られた中島健蔵(1903～1979)の著作集も出版されていません。同じ仏文畑で、これも著作の多い河盛好蔵(1902～2000)には『河盛好蔵私の随想選』7巻<914.6Z/102>がありますが、グレート・ワークスに相当するものはありません。このほか、研究者では、経済学の東畑精一(1899～1983)、増田四郎(1908～1997)、国文学の市古貞次(1911～)、日本史学に新しい地平を開いた網野善彦(1928～2004)、また評論家では、多くの読者を得ていた山本七平(1921～1991)、1960年前後に左翼系学生に大きな影響を与えた谷川雁(1923～1995)などの名前も、著作集のない大家として思い浮かびます。

グレート・ワークス本編の著者41人は、選定にあたって物故者に限定しましたが、巻末の著作集一覧の方は現在活躍中の著作者も多数含まれています。このなかに名前があっても不思議ではないのに著作集未刊の作家として、ここでは美術評論の高階秀爾(1932～)、仏文学と映画評論の蓮實重彦(1936～)の二人を挙げておきましょう。もちろん今後、全集、著作集が編まれる可能性は大きいと思われますが……。

以上は、本書『グレート・ワークスの世界』を編集しながら心にかかったことです。もともと思想・学術・評論系の著作者は、文芸、特に小説家に比べて売上げが見込めないため、出版に恵まれない傾向にあります。現在はまた、収益と採算がひととき求められる時代でもありません。個人著作集というかたちの出版文化の将来はどうなっていくのでしょうか。